

今井源衛・春秋会

我身にたどる姫君

1



桜楓社

我身にたどる姫君

1

今井源衛・春秋会

今井 源衛 (いまい げんえ)

大正8年生。昭和22年東京大学卒。清泉女子大学を経て、昭和31年より九州大学文学部勤務。昭和57年定年退官。現在、梅光女学院大学教授。九州大学名誉教授。文学博士。

＜主要著書＞ 源氏物語の研究(未来社)・紫式部(吉川弘文館、人物叢書)・花山院の生涯(桜楓社)・王朝文学の研究(角川書店)・紫林照徑(角川書店)・源氏物語6冊(小学館、共著)・祐倫光源氏一部歌(桜楓社)・国文学やぶにらみ(和泉書院)など。

我身にたどる姫君 1

定価 九八〇円

印刷 昭和五八年四月一五日

発行 昭和五八年四月二五日

著者 ◎今井源衛・春秋会

発行者 今井 肇

発行所 株式会社 桜楓社

〒東京都千代田区猿樂町二一八一三

電話 〇三(二九五)八七七

一 振替東京 六一八〇二〇

印刷所 共信社印刷所

製本所 大日製本印刷(株)

0393-83042-0723 Printed in Japan

遺本には充分注意しておりますが落丁・乱丁などの折には小社あるいはお買い求めの書店でお願いいたします。

序 文

もう二十年も昔のこと、九州在住の若手の古典学者の間で、月例の輪読会を持ちたいという話が持ち上り、手始めに取り上げたのが『狭衣物語』であった。まだ朝日の古典全書本も岩波の古典大系本も無い頃で、それだけに読む張り合いがあったのである。参加者は福岡・熊本の人あまり、「狭衣会」と名をつけて、福岡と熊本の間にある瀬高町の旅館の一室を借り、以後約十余年間、その間メンバーに若干の出入はあったが、ともかくも全巻読了したのは、大学紛争の終りごろであった。会員は平安朝文学専攻者ばかりではなかったから、はじめから特に会としての成果を世に問うことは考えないということに決めていたので、結果としてはほとんど具体的な業績の形では残らなかった。しかしその長い間、月一回の無上の楽しさだけは参加者の胸にいつまでも残ることになったのである。

「春秋会」は、この「狭衣会」員の中、福岡周辺に住む人たちが、その時の楽しさを忘れかねて、新たに数人のメンバーを加えて再出発したものである。発足は昭和五十一年四月、毎月一回拙宅に集って、今度は『我身にたどる姫君』を材料に、約五十回、昭和五十六年九月に全

八巻を読み了った。

会の名称は、この作品冒頭の「春夏秋冬のゆきかはるにつけて」から取った。会員氏名は、左の通り。

今井源衛・辛島正雄・工藤重矩・古賀典子・下山礼子・高松智・武谷恵美子・田坂憲二・田坂順子・中島あや子・西丸妙子・福井迪子・正木光恵（五十音順）

ほとんどは現在大学教官であるが、みな九州大学で私の講義に出席していた人たちで、私にとっては贅沢なくらいに、たいへん心楽しい会である。楽しい思いは皆共通しているとみえて、『我身にたどる姫君』が終ったあともなお会は存続している。

この会では、会員すべて専攻をほぼ同じくしていることもあって、気楽とはいってもただの読みっ放しではなく、何がしかの研究業績として形を遺すことを、当初から目標とした。

それにはほかに理由もある。第一には、この作品は従来学界でもほとんど手付かずのまま放置されているという事である。いわゆる擬古物語が研究者の意慾をあまり唆らないという事は、その文学的価値が低いという通説に絡んでごく普通に見られる現象であるが、この作品に限っていえば、まず何よりも、専門の学者を含めてほとんど誰も内容を読んでいないのである。その処女地を開拓する楽しさがたいへん大きかったのである。

第二はこの作品の文章の無類の難解度である。読まれないのは主としてその為である。大野

木克豊氏はこの物語について、

文章亦渋晦ニシテ人物ノ性情事件ノ發展ヲ記スコト明確ナラズ（略）。本書ハ語句ノ省略特ニ甚シクシテ解釈ニ苦シム所多ク（略）、文義ノ難解ニ、事実愈模糊タルノ憾少カラス

（『尊経閣善本解題』稿本、明治四四年二月）

と述べているが、一読の印象は正しくその通りである。しかし実は、苦心していちおう読み解けば、それはそれで話の筋もよく通るのであって、濃霧が晴れ、俄かに眼前に秀峯を仰ぐ感を催す事がしばしばである。これは古典研究に携わる者の至上の悦楽といふべきだろう。

第三にはこの作品の特異な性格である。それについては、「解題」に詳述したので、ここではさし控えたいが、それは単に風変わりというだけではなく、女がみずからの愛や性を語ることに於いて、まことに赤裸々で迫力に満ちている。ゆたかな真実性といってもよいだろう。それは同時代の『とはずがたり』にも匹敵、もしくはそれを凌ぐものではあるまいか。

この作品は「難解」の定評にあぐらをかいて放置するには忍びない、それだけの高い文学的価値を荷ったものである事を世に訴えたいというのが、現在の私どもの切なる願いである。

その趣旨もあって、本書の構成や内容について一、二お断りをしておきたい。

本書は、原文・語釈・現代語訳の三つから成るが、一般学術書とはやや異なつて、まず現代語訳を掲げ、ついで本文・語釈を配することにした。また、現代語訳は原文に省略の多い主語

などをつとめて補い、あまりに長い文は途中で切り、さらに時には、原文にはない必要最少限度の説明句を補足することも敢えてした。学術書としては問題もあろうが、作品の特異性と読者の便宜のための措置であることを諒とされたい。

本書の成稿に至る手続きとしては、輪読担当者が各回発表、討論の後、本文・語釈・現代語訳の原稿を執筆提出し、さらに討論の上、今井が加筆修正してとりまとめた。ただし、現代語訳に限っては、巻一―三は各担当者の試訳草稿の提出を求めたが、巻四以降はそれを止め、今井が単独に執筆した。また本文の整定・諸本校異注記の作業の中、諸伝本共通の欠陥本文を新しく改訂整定することは、今井が主としてこれに当り、他はすべて工藤重矩氏が担当された。

しかし、総じてこのすべての結果が、文字通り各回輪読会の討論に依ってはじめて生まれたものであること、今さういうまでもない。この作品の読解は、とうてい一人単独では果し得ない底のものであることを、あらためて今痛感しており、その点我々はいへん幸福であった。

本書の刊行を機に、この作品が研究者はもとより一般読書人にも広く読まれて、その真価が認められる日が近く来ることを、心から期待している。

なお桜楓社の及川社主がこうして本書を七冊のシリーズ物として特別に刊行されることに就いては、深く感謝の意を表したいし、貴重な所蔵本を底本として用いることを許して下さった尊経閣文庫、あるいは校異資料として、それぞれ御所蔵本の使用を許された宮内庁書陵部・金

子武雄氏にも心から厚く御礼申し上げたい。また編集の雑務に精力を傾けて下さった今井肇・相良伊津子の両氏にも合わせて感謝の意を表する。

昭和五十七年九月

今井源衛

梗概

▼前篇

「巻一」

音羽山麓の庵に、遠縁の尼と共に住む美しい姫君^①があった。年齢は十四、五歳。彼女は自分の父母が誰か知らされていない。その事でいつも乙女心を痛めていた。

吹雪の一夜、思いもかけず客が訪れる。関白^②の子息の三位中将^③が水尾中宮^④の御病気の平癒祈願に、比叡登山の帰途立ち寄ったのであった。

そのころ、水尾帝^⑤には中宮^⑥と皇后^⑦と二人の後があった。皇后には一宮^⑧（嵯峨院）・二宮^⑨（式部卿官）・女三宮^⑩（入道宮）が、中宮には三宮^⑪（兵部卿官・我身帝）・女四宮^⑫がそれぞれ生まれた。この二宮^⑨は美貌で好色の名が高く、三位中将^③は、これに対して篤実の人柄で、才気も臣下では第一の人と評判が高い。今度東宮に立ったのは、年齢順に一宮^⑧であったが、中宮は皇后に対して心中穏やかでなかった。

年明けて、三位中将^③は中納言に昇る。昨冬訪れた山里の人を忘れられない彼は、再度音羽山を訪ねる。木蔭から立ち聞かした姫君の琴の音に、いっそう心を唆かされて、尼君に意中をほのめかして、京へ帰った。

この我身姫^⑬は、昔、関白^②と皇后^⑦とがひそかに契りを結んだ秘密の子であった。関白はその事を知らなかったが、皇后はその秘密に心の休まる折とてなかったのである。

その後、中納言圓はしきりに音羽を訪ねる。二宮圓は中納言の行先を嗅ぎつけると、これも音羽の庵を訪れて、いきなり姫君の居間まで入り込み、姫の側に坐りこんでかきくどいた。尼君はやつとのこと二宮をなだめすかして引き揚げさせた。尼上はこのままでは危険と見て、皇后にこの事を知らせる。皇后は御心配で、姫君を音羽から女房の宣旨の実家に移した。

姫君のことが忘れられない二宮圓は再度音羽を訪ねるが、もはやもぬけの殻である。何かとごまかして姫の在処を教えようとしないう女房を恨みながら、部屋に漂う姫君の移り香を懷しみつつ、宮はむなしく京に帰った。中納言圓も同じ様にして悲しい目に会う外なかった。

宣旨の里に移った姫君圓はあらぬ他国に來た思いで、わびしい限りである。皇后宮圓もその処置に心を痛めて、五月ごろ病に臥し、実家へ退出される。

見舞にかけつけた関白圓を枕もとに招くと、皇后はそれまでの関白の好意に謝意を述べ、苦しい息の下で、東宮圓の後見を頼み、合わせて我身姫圓の将来を托すると、そのまま灯の消えるように息を引きとられた。

〔卷二〕

宣旨の里の我身姫圓は、母皇后の死後、父関白の邸に引き取られる。関白の妹の水尾中宮圓は俄かな出来事に驚いたが、中納言圓は、対の部屋に以前音羽で見かけた女房がいるのを

見て不審に思った。以後、彼は對の姫君^四をしきりに訪ねては、心を慰めている。かねての女三宮^四への恋心もつい忘れるほどであった。

二宮^四もあれ以来行方の知れない音羽の姫君を探している。年末に音羽に出かけて尼上に会い、姫君の形見の敷物を見ても、嘆きは深かった。

吹雪の一夜、中納言^四は三条宮を訪問した。目ざす女三宮^四の女房、中納言の君に手引きを頼むが、応じない。中納言を恋しているこの女房は、何事もなかった話を交わして帰ってゆく中納言の後姿を恨めしく見送っている。帰宅すると、中納言は女房の侍従相手に戯れる事でようやく胸のはむらを鎮めるのである。翌朝早々と出した女三宮あての恋文は、中納言の君が宮に取り次いだ、宮は一言の返事もなく、つれない限りであった。

その冬、関白の姫君^四は尚侍となった。

年も明けた新春、ライバルの皇后も亡くなって、得意気の中宮の様子をよそ目にして、水尾帝^四や女三宮^四は、追慕の涙に沈んでいる。そんな中でも、二宮^四だけは、依然として音羽の姫君^四の行方を知らせ給えと諸仏に願をかける騒ぎである。

中宮^四は、女四宮^四の将来を案じて、前途有為の中納言^四に縁付けようとくろむ。帝^四は、中納言には女三宮^四をというおつもりだったが、言い出したら後へはひかぬ中宮の気性でもあり、それも悪くはあるまいと同意される。中納言はこの事を耳にすると、悲嘆の底に陥ってしまった。

三月なかばのある夜のこと、中納言は三条宮を訪れて、愛人の中納言の君のもとで夜を明

かした。帰宅してから送った女三宮あての文を、宮はあい変らず手に取ろうともしない。が、中納言は性懲りもなく、その後も三条宮をしきりに訪れて、機会を狙っている。

ある夜のこと、遂に好機到来、中納言の君は女三宮のもとに手引きをする。中納言は夢の中に夢を見る心地のはかない逢瀬である。泣き臥すばかりの宮ではあったが、こうなつてみれば、中納言はなおさら女四宮との縁談はまっぴらという気になるのであった。婚儀はいよいよ明日と迫つた日のこと、珍しく女三宮から返事が来る。中納言はこらえきれず、とうとう病といつて床に就いてしまう。関白夫妻も溜息をつくばかりだが、息子がふびんでもあり、世間には内緒にとのつもりでも、いつしか中納言発病と聞きつけて、多勢の見舞客が来る。その上に、実は婚儀逃れの仮病との噂まで立つて中宮が立腹されるなど、皆大弱りであった。

【卷三】

中納言の女三宮恋しさは、いよいよ燃えさかるばかりである。中宮は関白を呼びつけて、嚴重な婚儀の催促である。関白もほとほと困惑するけれど、その原因が女三宮とは気づかないので、邸へ戻ると北の方ともども「元氣をお出し」と、息子を励ますばかりであった。中納言は、また三条宮に出かけて女三宮のもとへ忍び込むが、宮は頑として応じないままに夜が明けた。空しく引き揚げる中納言の手の中には、昨夜宮が御帳から逃げ出した時、金具にひっかかった髪が一筋握られていた。

賀茂祭が過ぎてから、女三宮は三条宮から内裏へ戻った。母なし子となった宮を父の水尾帝はふびんにお思いになる。五月は婚礼を忌む月だし、中宮も、近ごろは腹に一物、ふつとりと婚礼の事は口にされない。中納言はほっと一息ついている。

五月雨のしめやかな夕暮、中納言はいつものように、妹の尚侍園や対の姫君国を訪ねて、二人が姉妹のように似ているのに驚いた。

夏、秋も過ぎ、十月の神事をひかえて、女三宮が宮中から退出するのを帝は残念がって、職の御曹司に住まわせる。

中宮は、女四宮を内裏から退出させると、その夜だしぬけに使を遣わして、中納言を迎えにやる。正面切った仰せ言だからいやおうはない。二条宮に参向する中納言の心中は、悪夢を見る思いであつた。が、威儀を飾つた女四君はさすがに美しく可愛いくて、これまでの独り寝のあじけなさが慰められたのであつた。翌朝中納言は早々に退出したが、もはや取り返すすべもないわが身の上を思うにつけて、涙が溢れ落ちた。さっそく女三宮に文を送るが、例によつて宮は見向きもしない。三日の夜の露^{ところあらし}も予定通りに行われた。

女四宮は女三宮とは大ちがいで、満開の八重山吹のように、気位高く派手であるが、可愛いくて賢いところもある。中納言は、女三宮への恋はそれとして、女四宮相手に心の紛れる事の多いのも、これが男女の仲というものであろうか。ただ、この宮にはひどいやきもちの癖があり、中納言が隠し立てをしていて怪しいと思うと、来る日も来る日も側から離さず、恨みごとやら泣き出すやら、つねるわ、かみつくわ、の大騒ぎである。閉口にはちがいない

が、可愛さもひとしおで、中納言は我ながら不思議であつた。

秋に入つて、喪が明けた。月の明るい夜、故皇后が関白の夢に現れて、「子供が私たちと同じ過ちを犯しそうです」と告げた。関白はその意味が汲みとれなかつた。

八月、水尾帝^四は、かねての希望通り讓位され、嵯峨帝^四が即位、兵部卿宮^四が東宮に立つた。月末には尚侍^四が入内する。水尾院^四は女三宮^四の事が何よりも心配であつた。

ある日の夕方、訪れてきた関白^四に院はその苦衷を打ち明けて、女三宮の後見を懇請する。関白はそれをお受けした。

十月十日、関白は女三宮を北方として自邸に迎える。関白三十八歳、宮は二十歳前である。関白は宮に深い愛執を感じるが、中納言が宮を慕っているとうやうやく察しがつくにつけて、一方では、自分の軽率を悔いるのであつた。女四宮もまた中納言が姉に心を惹かれていると知つて、激しく嫉妬する。

秋の司召しに中納言は左大將を兼任する。十一月に入ると、水尾院は出家して水尾に隠棲された。

関白家ではそのころ、我身姫^四は女三宮^四と対面して、お互いによく似ているのに驚き、自身の出生の秘密もようやく解けたのである。それ以来この異父姉妹はいつも仲よく一緒だつた。

二宮^四は、噂の我身姫^四に心を唆られて垣間見すると、いつぞやの音羽の姫君であつた。矢も楯もたまらずに手引きをと、女房を責め立てる。

関白が内裏の宿直で留守の夜、大将^四は女三宮を、二宮は我身姫を、それぞれ目ざして二人の部屋に忍びこむ。宮は、姫君の抵抗に逢って目的を果せず、大将は、再び女三宮と契りを交わした。二宮が邸に戻ってひと眠りすると、夢枕に母后^四が立ち、我身姫^一への恋を戒めた。

延び延びになっていた我身姫の東宮^四参りが、年の暮に実現した。

新春を迎えて、尚侍^四が立后する。そのころに女三宮・女四宮・我身姫それぞれ懐妊と分り、人々各様に感慨が動いた。

▼後篇

〔巻四〕

十七年経った。関白^四（昔の三位中将）の子息の殿の中将^四と式部卿^四の子息の宮の中将^四とは仲が良い。八月十五夜、二人は名月に誘われて入道宮^四（以前の女三宮）を三条宮に訪れ、その足で遠く嵯峨院^四に伺候した。院の姫君^四の御簾の前を通る時には胸が躍った。

宮の中将^四の美しい妹^四は東宮^四の女御（麗景殿）であるが、ひそかに殿の中将^四と情を交わす仲である。我身姫^四は、今は東宮^四・一品宮^四の母后としてときめいている。

九月十三夜、俄かな内裏の焼亡で、我身帝^四と東宮とは三条宮に移った。東宮は三条宮の姫君^四と契りを交わす仲になり、愛執の念は深まるばかりである。女四宮^四はこの事を聞くと、夫関白^四の仕業と憤慨して、さっさと母女院^四のもとに引き移ると、姫君^四の東宮参り

の準備を急いだ。月末には、帝國・中宮國・東宮國も女院邸に移られ、姫君國の東宮参りも十月初めに執り行われた。三条姫國の悲嘆はやるかた無いが、十二月には、中宮國の尽力で、三条姫君も東宮御息所の旨公表された。

年があらたまつて、我身帝が讓位された。嵯峨院姫君國は皇后として承香殿に、関白姫君國は中宮で藤壺に、三条姫君國は女御として後涼殿に、式部卿宮の姫君國も女御として麗景殿に各住み、我身中宮國は皇太后となつて、一品宮國と弘徽殿に住むこととなる。帝の寵愛は、後涼殿女御に格別厚い。宮の中將國は中納言に、殿の中將國も兼右大將となつた。

秋に入り、中納言國は、かねてから懸想している一品宮國へ手引きをせよと、女房の大貳を責めるが、大貳は応じない。藤壺中宮國は懷妊して二条宮へ退出し、祈禱やら見舞客やらで大賑わいである。帝は、嵯峨に退出したままの承香殿皇后國を思いやって、使を遣わして還啓をすすめる。やがて皇后は内裏へ還啓になる。

九月の野分の夜、中納言國は人氣の少い後涼殿に忍び入つて、女御國に逢い思いを遂げた。翌朝、帝は胸騒ぎを覚えて、皇后のもとから後涼殿にあわてて戻り、女御の沈んだ様子を見てやさしく慰める。一方、右大將國は、月明りの夜、麗景殿女御國とはかない契りを結んだ。

やがてある日、三条帝國は、茵の下から中納言國の恋文を発見し、後涼殿女御との情交を知る。そして、今後はこうした隙を作るまいと、片時も女御を側から離さないようになる。中納言は苦しみに堪えかねて、恋心を止める祈願に九月下旬熊野参詣に出立した。